hector
Playing Interface

FOR SALE and USE IN JAPAN ONLY
本品の輸出、使用営業及び賃貸を禁じます。

株式会社 ヘクト

〒102千代田区平河町1-5-13平河町UTビル
PHONE.03-5275-5481代
FAX.03-5275-3544

ファミリーコンピュータ・ファミコンは任天堂の商標です。

hector
Playing Interface

FAMICOM FAMILY

HCT-53/015

囲碁指南'92

資料提供／日本棋院

取扱説明書

任天堂 ファミリーコンピュータ™

囲碁史上に残る三大碁聖の名勝負や、'90年度の７大タイトル戦などの名局の棋譜を122局収録しました。これらのすべての棋譜で「観戦」と「棋力判定」が行なえる「囲碁指南'92」をあなたの棋力アップにぜひお役立てください。

このたびは、㈱ヘクトのファミリーコンピュータ用カセット、「囲碁指南'92」をお買いあげいただきまして、まことにありがとうございます。ご使用の前にこの取扱説明書をよくお読みになって、正しい使用方法でお楽しみください。

■使用上の注意

●精密機器ですので、極端な温度条件下での使用や保管を避けてください。また強いショックを与えたり、絶対に分解しないでください。

●端子部に手をふれたり、水にぬらすなどよごさないようにしてください。故障の原因になります。またシンナー・ベンジン・アルコールなどの揮発油でふかないでください。

●テレビ画面からできるだけ離れてゲームをしてください。

●長時間ゲームをするときには、健康のため約１時間ごとに10〜20分の小休止をしてください。

●ご使用後はＡＣアダプターをコンセントからぬいてください。

囲碁指南'92

目　次

ゲームのスタート

　コントローラーの使い方 ……… 2

名局観戦 ……… 4

棋力判定 ……… 6

収録棋譜一覧

　古典　本因坊道策編 ……… 8

　　　　本因坊秀策編 ……… 12

　　　　本因坊秀哉編 ……… 16

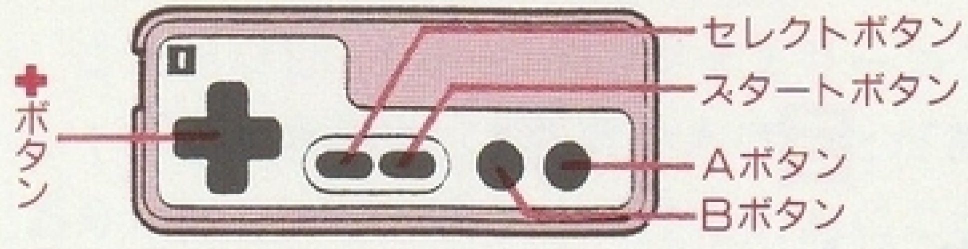
現代　'90年度７大タイトル戦 ……… 20

呉清源置碁 ……… 28

ゲームのスタート

古今東西の名対局の棋譜を122局も収録しています。「名局観戦」「棋力判定」にお役立てください。

■コントローラーの使い方



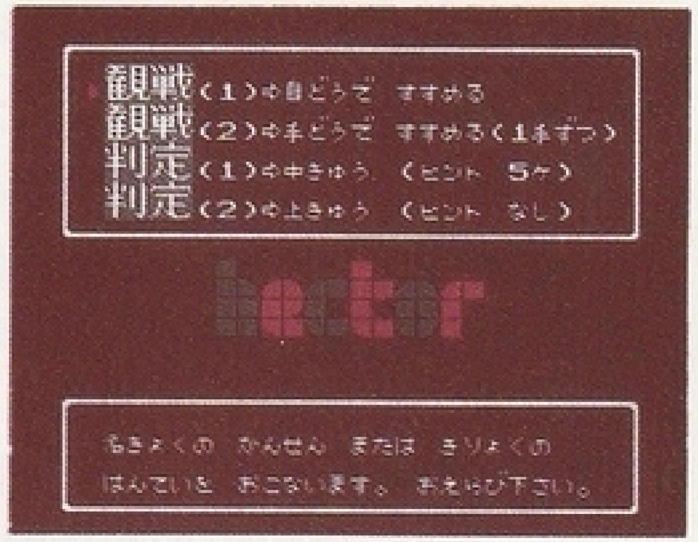
※このゲームでは、コントローラーはⅠだけを使用します。ジョイスティックは使用できません。

Aボタン	✚ボタンで選んだコマンドを実行するときや、画面を次に進めるときに使用します。自動観戦では、ゲームの中断と再開にも使用します。
Bボタン	一度選んだコマンドのキャンセルに使用します。ゲームが始まってからは、設定を変えたり、早送りや戻し、ゲームを中止するときにも使用します。
スタートボタン	ゲームをスタートするときに使用します。
セレクトボタン	ゲームの音声を消したり出したりするときに使います。
✚ボタン	コマンドを選ぶときに使用します。判定モードでは、石を打つ場所を決めるカーソルを動かすときにも使用します。

■ゲームを始める

電源を入れるとタイトル画面が現われます。どのボタンを押しても次の画面に変わり、ゲームがスタートします。

■「観戦」か「判定」かを選択する



タイトル画面に続いて、選択画面が現われます。ここで「観戦」か「判定」かを決定しましょう。このときに「観戦」は自動か手動を選び、「判定」はヒントが出る中級かヒントなしの上級を選びます。✚ボタンの上下でカーソルを移動させ、プレイするモードを選択しましょう。Bボタンを押すとキャンセルになり、前の画面に戻りますので、最初からもう一度決めなおすことができます。

名局観戦

本ソフトに収録されている対局122局すべてを観戦できるのが、名局観戦です。

■観戦のスピード

選択画面で「観戦１」を選ぶと、対局のスピードの選択画面が表示されます。大きい数字を選ぶと早く、小さくなるほどゆっくりになります。観戦をスタートしてからも、Ｂボタンを押すと現われるウインドの中から、「スピードをかえる」を選択すると、スタートのときと同じ要領でスピードを変えることができます。

「観戦２」を選択した場合は、一手一手あなたのペースに合わせ、確認をしながらＡボタンで進めてください。

■棋譜の選択

観戦する棋譜を選びましょう。囲碁史上に残る三大碁聖の名勝負「道策」「秀策」「秀哉」や、'90年度に行われた７大タイトル戦「現代」、現代囲碁の創始者といわれる巨星・呉清源「置碁」の中から一つを

選び、✚ボタンでカーソルを合わせＡボタンを押します。次に、それぞれの中から見たい対局を✚ボタンで選択し、Ａボタンで決定するとスタートです。

■観戦のスタート

「観戦１」で観戦中の一時中断と再開は、Ａボタンで行います。

また、観戦が始まってから設定などを変えたい場合は、自動・手動のどちらのモードでも、Ｂボタンを押しましょう。ウインドが表示されます。

●１手もどす……今打った手を、もう一度確認することができます。

●はやおくり（もどし）……見たい手目のところから始めることができます。これを選択するとサブウインドで何手目から始めるかを聞いてきます。✚ボタンの左右で桁を変え、上下で数を入力し、Ａボタンを押すと決定になります。

●スピードをかえる……観戦のスピードの項目を参照。

●このままつづける……このウインドのキャンセルです。

●中止する……観戦の中止に使います。これを選択するとサブウインドが表示されます。最初の選択画面にもどる場合は「おわる」を、もう一度最初からこの対局を見直したい場合は「もういちどはじめから」を選びましょう。

棋力判定

棋力の判定も、収録されているすべての棋譜で行えます。

■レベルの選択

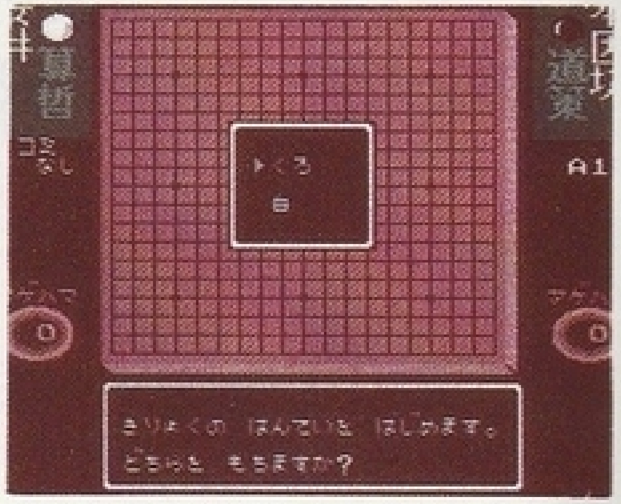
棋力の判定では、まずレベルを選びます。「判定１」は中級者用（５級以上から４段以下）で、ヒントが５か所までできます。「判定２」は上級者用（２級以上から７段まで）で、ヒントはでません。

■棋譜の選択

棋力の判定を行う棋譜を選びましょう。対局の選び方は、名局観戦の場合と同じです。

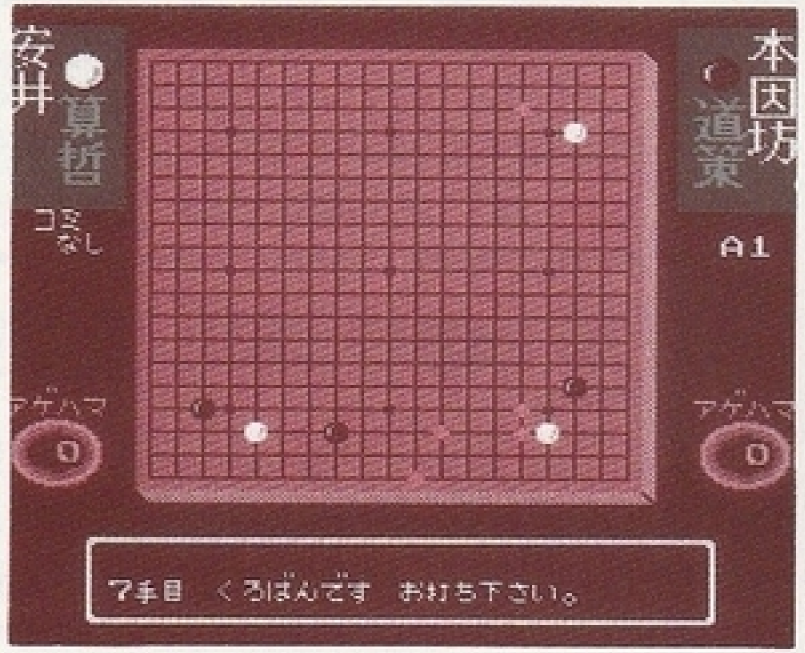
■先手・後手（黒・白）を選ぶ

「次の一手」を推察する棋士を選びます。黒番、白番どちらでも選ぶことができます。ただし、置碁は白番だけです。



■対局開始

黒番を選ぶと６手目、白番を選ぶと７手目まで自動的に進みます。「判定１」の場合、ヒントが最大５か所まで表示され、ヒントの出たところ以外には置けません。



プレイヤーの選択した棋士の番になったら、✚ボタンで天元にあるカーソルを推察した場所に移動させ、Aボタンで決定しましょう。推察した手が正解なら正の字が点滅表示され、不正解なら×印が点滅表示されます。

対局を中止する場合は、Bボタンを押しましょう。サブウインドで確認してきます。

■棋力判定

対局が終了したり、また途中でやめた場合も、正解率と棋力が表示されます（本ゲームでの正解は最善手ではなく、棋士が実際に打った手のことです）。

1 ●本因坊道策　○安井算哲

「おもしろい変化」寛文7（1667）年

黒21の後白22のコスミツケ以下は、まず考えられる一本道の進行であるが、おもしろい変化であった。黒71は天王山。

2 ●本因坊道策　○安井算哲

「好きな目外し」延宝元（1672）年

道策は好んで目外しを打っているが、それはケイマにかけて塗って利があるのと、また相手を攻めやすい2点からと推理できる。

3 ●南里与兵衛　○本因坊道策

「天元」不明

天元に対しては白も黒もその石を意識して布石しなければならない。それだけ天元の布石は難しいのである。

4 ●南里与兵衛　○本因坊道策

「黒方針悪し」寛文12（1672）年

黒41以下の方針は悪い。こうなった以上は黒41で46とコスンで、白45黒47と打つべきであった。黒39が敗着。

5 ●福尾玄故　○本因坊道策

「好機逃さず」不明

黒78は最高である。98、100もよいタイミングであった。さすがに三子のハンディは大きいという実証でもある。

1 ●安井知哲　○本因坊道策

「打ち過ぎ」寛文8（1668）年

白64は打ち過ぎ。この手では普通にノビている方がよかった。65以下71までと応じて白のキズを残した。黒91が敗着である。

2 ●安井知哲　○本因坊道策

「知哲の傑作」寛文10（1670）年

これは知哲と道策の数多い対局の中で、知哲の自慢できる勝の碁である。なお、黒89では踏み込まねば地合が怪しい。

3 ●安井知哲　○本因坊道策

「大切なのは下辺」延宝2（1674）年

この進行で注意しなければならないのは下辺の黒地がどれほどまとまるかである。黒87は敗着である。

4 ●安井知哲　○本因坊道策

「大を捨て小に就く」延宝2（1674）年

黒131、133はよい手である。三子を取り込んだのは、十三目。白146が敗着。黒147で見損じしていたのだろう。

5 ●安井知哲　○本因坊道策

「衆妙の詰碁」延宝2（1674）年

知哲は死活の見損じをした。白59黒60までとなって、この下辺の黒は無条件ではイキがなくなった。

1 ●安井知哲　○本因坊道策

「アテぬのが敗因」延宝４（1676）年

黒の敗着ともいうべき打ち惜しみがあった。それは左上隅の白44に対する黒からのハネアテである。

2 ●桑原道節　○本因坊道策

「名人因碩の二子」不明

黒90がこの際の勝ち手で、ここで道節はさすがといわれるシノギを展開している。白83は鋭い手、また白85、87も手筋。

3 ●熊谷本碩　○本因坊道策

「門下五虎の一人」元禄10（1697）年

白108を本碩は見損じていたのだろう。白108はさすが道策で、これで黒の野望は消えてしまったのである。

4 ●井上因碩　○本因坊道策

「黒苦しい活」天和３（1683）年

黒95が敗着となった。この手は97に打つべきで、白のキメが見事であった。そのあと白116まですばらし手順である。

5 ●境　道哲　○本因坊道策

「天王山を逃す」不明

黒24のときの天王山は右上29である。したがって24でも25でも黒28でも、29に打つべきであった。

1 ●小倉道喜　○本因坊道策

「賢明な三子捨て」元禄10（1697）年

黒44から52まで三子捨てて外勢を張ったのは賢明な処置であった。黒は146が最後の敗着である。

2 ●小倉道喜　○本因坊道策

「攻防業備の一着」元禄10（1697）年

白62のときに黒64はよい手であった。攻めと守りの手である黒102となって、もはや白に勝味はない。

3 ●安井仙角　○本因坊道策

「非常手段を逸す」元禄９（1696）年

白の61は小さくて、これで白は最後に残された逆転を逸した。黒162、164とこの味をなくされては、黒の勝ちは決まった。

4 ●新雲上浜比賀　○本因坊道策

「見損じ」天和２（1682）年

白5、7は道策の十八番。黒58は白61のサガリでワタれぬのを見損じたのだ。白141となっては、黒の非勢である。

5 ●雛屋立甫　○本因坊道策

「手筋の見本」元禄年間

黒66からの反撃は、この打ち手が相当の棋力である証明。しかし、白79からが絶妙の手筋であった。

1 ●本因坊秀策　○本因坊秀和
「本因坊秀和評」嘉永３（1850）年12月
黒は白の62を気付かなかったために敗れた。

2 ●關山仙太夫　○本因坊秀策
「關山仙太夫自評」嘉永４(1851)年６月３日
黒出来宜し。然るを見損出で其後拙手あり、白妙手多き故敗す。

3 ●關山仙太夫　○本因坊秀策
「關山仙太夫自評」嘉永４(1851)年６月５日
黒打方宜しく誰に見せても言分あるまじとのことなり。

4 ●關山仙太夫　○本因坊秀策
「關山仙太夫自評」嘉永４(1851)年６月13日
白打方妙、黒打方大に悪し。黒27手順悪し。黒31、39甚だ拙手、黒69の手順宜しからず。

5 ●關山仙太夫　○本因坊秀策
「關山仙太夫自評」嘉永４(1851)年６月20日
黒出来相応なるを拙手続出して散々になる。黒17の打方によりては作碁にならず。

1 ●本因坊秀策　○本因坊秀和
「見事なフリカワリ」嘉永４（1851）月10月
黒47から69まで見事なフリカワリ。黒77は苦心の一手。白216はシノギの妙手。

2 ●本因坊秀策　○安井算知
「御城碁」嘉永４（1851）年11月
秀策は本因坊家跡目として嘉永２年から文久元年まで御城碁に列し、19局を全勝した。

3 ●岸本左一郎　○本因坊秀策
嘉永５（1852）年10月
この碁は本因坊秀和、伊藤松和が盤側に在って観戦した。

4 ●太田雄蔵　○本因坊秀策
嘉永６（1853）年正月
秀策、雄蔵30番碁は赤井五郎の主唱に因るもので、碁界の圧巻である。本局はその初番である。

5 ●本因坊秀策　○太田雄蔵
「本因坊秀和評」嘉永６（1853）年２月
黒7にたいし、白8、10、12、14は損。黒25と打ち、後35とハネだしは面白し。この形黒の方少し優る。

1 ●本因坊秀策　○太田雄蔵

「本因坊秀和評」嘉永６（1853）年３月

この局黒の打廻し巧妙。黒41よし。黒95はコウ争の禍根を絶ち、味うべき手である。

2 ●太田雄蔵　○本因坊秀策

「本因坊秀和評」嘉永６（1853）年６月

白10、12、14は新工夫。白22の前に黒21にて3の二に打てば面白い。黒87のとき、白はすでに形勢有利と見て88と収まった。

3 ●岸本左一郎　○本因坊秀策

嘉永７（1854）年７月

この碁左一郎２目勝なるに生来薄弱徹夜の疲労に精神もうろうとして４目の出を見損じて２目敗となれり。

4 ●井上因碩　○本因坊秀策

「御城碁」嘉永７（1854）年11月

秀策流を逆用されたが、力が違いすぎる。

5 ●服部　一　○本因坊秀策

安政３（1856）年７月

白104でもう一手かければ連絡は確かだが、緩まないのが秀策の碁である。黒127は最後の勝負手である。

1 ●水谷縫次　○本因坊秀策

「13才の少年」安政４（1857）年４月

本局はあまり時間をかけていない。棋聖といわれる秀策を向に廻し、思い切って打っていく鋭さは、実に胸のすく気合のよさである。

2 ●本因坊秀策　○服部正徹

「御城碁」安政６（1859）年11月

下辺の戦いで秀策のヨミは確かだ。正徹はこの翌年41才で死去。

3 ●村瀬秀甫　○本因坊秀策

「村瀬秀甫評」文久元（1861）年

白10は打たぬ方であるが趣向である。黒29は14の四がよい。白54は熟考の着であるが極めて難しい。

4 ●村瀬秀甫　○本因坊秀策

「村瀬秀甫評」文久元（1861）年

黒59はゆるい。61へ打ち続けるべきである。白96と隅へつけたのは妙手。黒97と打って振り替わったのは少し損。この前3目の敗となった。

5 ●村瀬秀甫　○本因坊秀策

「後進の育成」文久元（1861）年

文久元年に秀甫とじっくり十番碁を打ち、胸を貸す。

1 ●中川千治　○本因坊秀哉

明治41（1908）年４月

黒21は22の大場を占めねばならず、黒49も50の大場を打つべきである。中の白が薄いが白100に手がまわって安心。

2 ●広瀬平治郎　○本因坊秀哉

明治41（1908）年４月

第２線をなん本もはうことがよいはずはない。白54は変則。黒67は75がよい。

3 ●野沢竹朝　○本因坊秀哉

明治41（1908）年11月

白20は趣向。黒67は9の四がよい。白74はあまり無造作であり、75がよい。

4 ●土屋秀元　○本因坊秀哉

明治42（1909）年１月

黒51では54に守る方が堅実。白80は悪手で、黒81のとき白83と伸びる手があると誤認。黒107は悪手。

5 ●野沢竹朝　○本因坊秀哉

明治42（1909）年４月

黒37は38に切るべきである。黒39は重い。左下の黒大石の代償が、上辺黒129ないし140程度では得失が問題にならない。

1 ●広瀬平治郎　○本因坊秀哉

明治42（1909）年６月

白57は重く、13の十四がよい。黒60は悪い。白89がおそらく敗因で、これでは92だった。

2 ●泉喜一郎　○本因坊秀哉

明治42（1909）年６月

黒18は70がよい。白51は常用の手筋。黒114が敗着である。これを黒6の六、白121、黒124とすれば、未だ争えた。

3 ●井上因碩　○本因坊秀哉

明治42（1909）年10月

白62は好機を利かした。白78まで塗られては黒が悪い。白136の急所をついて以下42まで、黒は万策つきた。

4 ●鈴木為次郎　○本因坊秀哉

明治43（1910）年10月

黒22は単に26とひらく方が優る。白33は打過ぎで、ここから急迫せしめたのは悪い。

5 ●井上因碩　○本因坊秀哉

明治43（1910）年11月

黒67まで猛然と取りかけて75とやめてしまったのは解せない。黒149は手筋。黒161は当然162の切りである。

1 ●広瀬平治郎　○本因坊秀哉

明治44（1911）年２月

黒23、25とされて、白応手に苦しむ。白44は悪手で碁を急にした。黒121となっては白と争う余地はない。

2 ●岩佐銈　○本因坊秀哉

明治44（1911）年８月

黒54では64が正しい形である。黒226は235が大きい。黒228でも235とすべく、そうすれば1目余せた。

3 ●高部道平　○本因坊秀哉

大正元（1912）年10月

黒57と強く２段バネされて白は困った。黒75が緩着。この手は88が正しく、黒77でも88であった。白78で中央の勢力が逆転。

4 ●野沢竹朝　○本因坊秀哉

大正２（1913）年７月

黒54は60が正しく、61と切断される手を見損じていた。白153が先着。60に当てこめば勝敗は決していた。

5 ●岩佐銈　○本因坊秀哉

大正２（1913）年８月

白58、60の出切りが無謀で形勢を損じた。白76ないし86で上辺の黒が取られ局面混沌。

1 ●土屋秀元　○本因坊秀哉

大正２（1913）年11月

黒74は白81を見損じた。この手では83が正しい。黒106と白107では白が大いによい。

2 ●鈴木為次郎　○本因坊秀哉

大正３（1914）年６月

白55は軽率もはなはだしく、59もしくは56に控える他はなく、黒56ないし60の切断を見損じていた。

3 ●岩佐銈　○本因坊秀哉

大正３（1914）年７月

黒62と白63の打交は黒損。白113は急所だが、白15ハネを打つべきで、黒14で17とすれば大勢を制していた。

4 ●雁金準一　○本因坊秀哉

大正９（1920）年

黒57は74、黒65は70である。黒95も悪手で8の七へ飛ぶくらい。白96とのぞかれて、黒は非常に苦しい。

5 ●中川亀三郎　○本因坊秀哉

大正13（1924）年12月

黒61ではまず63に切るべき。白92は重い。黒143は妙手、白152は156が正しい。白158が敗着。

1 ●加藤正夫九段　○小林光一棋聖

「棋聖戦七番勝負第15期第1局」

白88とコスミ出して好調。白100のオサエは先手。黒171までうまくシノぐ。黒175は鋭い。白180とコウにしたのが敗因で、敗着は白212。

2 ●小林光一棋聖　○加藤正夫九段

「棋聖戦七番勝負第15期第2局」

白35ツケは新工夫。黒73はぬるい。白78は痛恨の敗着。黒79が勝着。白80は手筋。

3 ●加藤正夫九段　○小林光一棋聖

「棋聖戦七番勝負第15期第3局」

黒33、白34、36はお互い最強。白68にトビ優勢。黒81は問題。白94の消しが好調。白120、122は逃げ込み。

4 ●小林光一棋聖　○加藤正夫九段

「棋聖戦七番勝負第15期第4局」

黒57と進出して好調。黒73の打ち込むは変調。黒99までの生きは判断ミス。黒103はしかたない。白118となっては黒つらい。

5 ●加藤正夫九段　○小林光一棋聖

「棋聖戦七番勝負第15期第5局」

白46と抜き黒47となったフリカワリは互角。黒67は72がよい。黒93のツギはごく普通だが、これが敗着となる。

1 ●小林光一棋聖　○加藤正夫九段

「棋聖戦七番勝負第15期第6局」

黒41はきびしい手。白50は自慢の一着。黒77は絶好点。白84は打ちすぎ。「まともに取りにいったのが敗因」と小林棋聖。

2 ●加藤正夫九段　○小林光一棋聖

「棋聖戦七番勝負第15期第7局」

黒51の2段バネが強手。白は58の当然の一着。黒67のツケが痛恨の一手。黒91は95のオサエがよく、黒99のオシは小さい。白104が決勝。

3 ●大竹英雄九段　○小林光一名人

「名人戦七番勝負第15期第1局」

黒39カケはこの一手。黒51は大竹の持ち味。白62は小林流のコスミ。黒65は重大な逸材で66に打つべきだった。

4 ●小林光一名人　○大竹英雄九段

「名人戦七番勝負第15期第2局」

白50、52のツケハネが、さばきの手筋。白98がタイミングよく決まった。黒127、129と2子にアテたのが敗着。

5 ●大竹英雄九段　○小林光一名人

「名人戦七番勝負第15期第3局」

白60は大気合の一手。白78は急所の切り。黒117と切って大コウ。白120コウツギはやむを得ない。

1 ●小林光一名人　○大竹英雄九段

「名人戦七番勝負第15期第 4 局」

黒49は中盤の急所。黒63はふっくらとした好手。黒87は好手。白106が敗着。

2 ●大竹英雄九段　○小林光一名人

「名人戦七番勝負第15期第 5 局」

白32が急所の攻め。白48も互いの急所。白68がさばきの急所。黒157は投げ場を作ったもの。

3 ●小林光一名人　○大竹英雄九段

「名人戦七番勝負第15期第 6 局」

黒61は気合。白94、96は二手一組の妙手。黒105は強手。白106が敗着。

4 ●小林光一棋聖　○趙　治勲本因坊

「本因坊戦七番勝負第45期第 1 局」

黒81と切り返したのが絶妙の一着。黒97が最大の見損じで白100の手をうっかりした。白104と取られては勝負あった。

5 ●趙　治勲本因坊　○小林光一棋聖

「本因坊戦七番勝負第45期第 2 局」

黒67は好手。白76が強手。白96で一気に細かくなった。白160がヨセの好手。黒171が疑問手。

1 ●小林光一棋聖　○趙　治勲本因坊

「本因坊戦七番勝負第45期第 3 局」

白20は趣向。黒29に白30と迫るのは棋理にかなっている。白120から中央のヨセ。白170は勝負手。

2 ●趙　治勲本因坊　○小林光一棋聖

「本因坊戦七番勝負第45期第 4 局」

白32が急ぎ過ぎ。黒49から第2ラウンド。黒53からは非常手段。白64とポン抜かれては悪い。

3 ●小林光一棋聖　○趙　治勲本因坊

「本因坊戦七番勝負第45期第 5 局」

白22からの切りは当然。白52は強行手段。黒75に対する白76は絶妙のシノギで黒73以下は全部持ち込み。

4 ●趙　治勲本因坊　○小林光一棋聖

「本因坊戦七番勝負第45期第 6 局」

白50は強手。黒71まで左辺は白一子を取り込んでの確定地は大きい。黒89と白90は見合い。

5 ●小林光一棋聖　○趙　治勲本因坊

「本因坊戦七番勝負第45期第 7 局」

黒29に対する白の受け方は難しい。白62、64は強引な手段。黒97は小さな手で他に大場がたくさんある。

1 ●趙　治勲十段　○武宮正樹九段

「十段戦五番勝負第28期第１局」

黒25は苦心の一着。白46は武宮流。白80ヒラキも苦心の一着。黒99ノビがムリだった。

2 ●武宮正樹九段　○趙　治勲十段

「十段戦五番勝負第28期第２局」

黒9の大ゲイマは武宮流。白48は悪い。白78も悪い。黒145から147と手になっては投了もやむを得ない。

3 ●趙　治勲十段　○武宮正樹九段

「十段戦五番勝負第28期第３局」

黒41は43へノビた方がよい。黒65は問題。白92、94のハネツギは95とハネる一手。

4 ●武宮正樹九段　○趙　治勲十段

「十段戦五番勝負第28期第４局」

白26は治勲流。黒27は局勢に遅れた。白54は先に56とマガるべきで、黒55も56とオシて行くところ。

5 ●趙　治勲十段　○武宮正樹九段

「十段戦五番勝負第28期第５局」

白18は武宮流、対する黒25が治勲流。白84からは武宮流の寄りつき。白116は手筋である。

1 ●小林光一棋聖　○林　海峰天元

「天元戦五番勝負第16期第１局」

黒25は英断。白50はいかにもプロらしい手。白96は手筋。黒111のキリがねらいの必殺手。

2 ●林　海峰天元　○小林光一棋聖

「天元戦五番勝負第16期第２局」

黒55までの攻めは強烈。白84に黒85とハザマをついて迫力のある攻め。黒151となって上辺に大地ができて黒厚い。

3 ●小林光一棋聖　○林　海峰天元

「天元戦五番勝負第16期第３局」

白36のツケがきびしい。白50は短兵急。白90のツケがきびしい。黒149が甘く、黒167が敗着。

4 ●林　海峰天元　○小林光一棋聖

「天元戦五番勝負第16期第４局」

黒75が大きい。黒95のツケがこの碁のハイライト。白106は痛恨の一着で、黒107が大きい。

5 ●加藤正夫王座　○羽根泰正九段

「王座戦五番勝負第38期第１局」

白26の積極策にたいし、黒27は最強の反発。黒49は強烈。黒111、113は必死の反発。黒119は手筋。

1 ●羽根泰正九段　○加藤正夫王座

「王座戦五番勝負第38期第２局」

白88が自慢の寄りつきで、黒89はつらい辛抱。白102に回って地合のバランスが崩れた。序盤の攻防が見どころ。

2 ●加藤正夫王座　○羽根泰正九段

「王座戦五番勝負第38期第３局」

白18、20の手段は大錯覚で、敗着である。黒29とカカえて禍根を断ち、黒59の三々から69と侵入してはっきり優勢。

3 ●羽根泰正九段　○加藤正夫王座

「王座戦五番勝負第38期第４局」

黒45のツケが強打。白58は絶好の打込み。黒123の後手は大変で、急所白124に回られる。白132、黒133で旧損。

4 ●羽根泰正九段　○加藤正夫王座

「王座戦五番勝負第38期第５局」

白12が新手。黒61はやや重複。白は好守好攻。黒157と四子を惜しんだのは失着。黒179ががんばりすぎの敗着。

5 ●小林覚九段　○小林光一碁聖

「碁聖戦五番勝負第15期第１局」

黒55がすましすぎ。白56とサガったときに、黒57が敗着となった。白152と生きられては投了もやむを得ない。

1 ●小林光一碁聖　○小林覚九段

「碁聖戦五番勝負第15期第２局」

黒19はきびしい反撃白20と切って激しい戦い。黒83までに黒の優位がはっきりした。白92から勝材を求めるも及ばず。

2 ●小林覚九段　○小林光一碁聖

「碁聖戦五番勝負第15期第３局」

白32は気づかない手で、ねらいは36の打ち込み。黒73と中央を備えたのが敗因。黒77が敗着。

1 ●アマ７段格　○呉清源

「黒の追込」

黒146、148は最高のヨセ。そしてようやく黒150のシギに手を廻して、黒はかなり寄りついて碁を細かく持って行った。結果は持碁。

2 ●アマ７段格　○呉清源

「痛恨の一着」

黒130が痛恨の一着である。もう一歩というところまで白を追い詰めて、大魚を逃した。刀折れ矢つきる。

3 ●アマ７段格　○呉清源

「置碁の模範」

黒106と白の大石にトドメを刺したのは、まことに適切。これで後は左辺の上下の黒が殺されなければよいのである。

4 ●アマ６段　○呉清源

「呉清源定石」

白1、3の外ヅケ定石は、呉師の好きな定石。そして黒6のとき手抜きするのが呉清源定石である。中地の囲い方にギモンがあった。

5 ●アマ６段　○呉清源

「黒の蜂の巣城」

放っていても十五目はつくと思っていた中央の黒の厚味。蜂の巣のようになってそばに寄りつけないといったが、一目もなくなった。

1 ●アマ６段　○呉清源

「黒攻めの方向を誤る」

黒50で51とつぐか黒56とハネるかどちらかを選ぶべきである。ようするに黒は戦いの場所を誤ったのである。

2 ●アマ６段　○呉清源

「碁とは地を取るもの」

黒地は下辺だけ（約三十目）こう地を損してはどうしようもない。白に三隅取られていることが、最初から地の手をあまり打っていない。

3 ●アマ７段格　○呉清源

「互先の気合で」

三子の碁は地を取って白の仕掛けて待つのが要領がよい作戦だが、この碁は最初から黒が仕掛けて力負けしてしまった。

4 ●アマ６段　○呉清源

「古武士奮戦」

土俵ぎわまで追い詰めて、惜しいところでミスが出て大魚を逃したが、喜寿を過ぎてこれだけ立派な碁を打てるのはさすが。

5 ●アマ６段　○呉清源

「強烈壁はがし」

呉師と打って戦うときは一対一や、二対一で戦ったのでは力が違うからとても勝てない。戦うなら白一人に対して四人がかりか。

1 ●アマ6段　○呉清源

「終盤の大乱戦」

白159右辺の黒を取られては勝負あったと見られた。だが、このあと異変がおきる。169と欲ばったために175のところのコウとなった。

2 ●アマ6段　○呉清源

「息もつかせぬ激戦」

黒76は黒81とコスんでとめる方がよかった。黒78まで非常に慎重に打ち進めてきたが、黒80のハネは軽率だった。

3 ●アマ6段　○呉清源

「敢闘精神」

最終黒240のトリが五目強の手で、これで黒の勝ちが決まった。碁に負けて勝負に勝った一局。だが勝ちは勝ち、大殊勲である。

4 ●アマ6段　○呉清源

「空中戦」

右上から流れている黒石がまだ治まっていない。中央左の黒の一団もはっきりしない。すでに碁にされている。敗因は難しく打ったこと

5 ●アマ6段　○呉清源

「痛恨の一手」

黒78から黒80と切断して猛然と反撃に出た。白のピンチである。白85、87と逃げだした。黒88が痛恨の一手、無理だったのである。

1 ●アマ5段　○呉清源

「中地を取るな」

やはりスミから辺の地を取ることが、天元の石を働かす以上に大切だと思う。中央の地を取る作戦に出たことが、この碁の敗因。

2 ●アマ5段　○呉清源

「最後の敗着」

碁はヨセに入ったが、すでに形勢不明。黒146が敗着になった。やはり地を取らなければ勝てない。

3 ●アマ5段　○呉清源

「勝てる攻合」

終始一貫白を攻めに攻め、石を捨てて得をはかる戦法を見せ、しかも堂々と押しきった黒の打ち振りは見事だった。

4 ●アマ5段　○呉清源

「黒地変じて白地」

この碁、黒62で2目を取り切っている方が、黒優勢であった。その後黒90をカケツいでいれば、これからという棋勢であった。

5 ●アマ5段　○呉清源

「攻め合いの攻防」

いずれのしても黒66、68と打って白69とキラれ、白73とかなめの一目を取られたのは痛かった。これで中の白の攻めがきかない。

呉清源置碁E

1 ●アマ4段　○呉清源

「惜しい緩着」

白には19以下の弱石と、右辺から中央の白と二つの弱い石を抱えているだけに、黒優勢という判断となる黒28が敗着となる。

2 ●アマ4段　○呉清源

「賊手の妙手」

黒90とシキアタリ白91に黒92と出てきた。この手がすばらしくよい手である。ここで白は93とオサエ、以下白99と打った。黒100が敗着。

3 ●アマ3段　○呉清源

「天才少年」

少年は十二才である。少年は朝日新聞主催の少年少女囲碁名人戦で大阪地区の三位、全国大会に出場して四回戦まで勝ち進んだ。

4 ●アマ4段　○呉清源

「勝負どころで石が上に」

黒石が白の上に行ってしまったために、下辺に7目もの白地をつくられてしまったのである。これで勝負が決まった。

5 ●アマ3段　○呉清源

「カトレアの花は散った」

本局は紅一点女性である。碁の方は晩学で昭和44年から初めて河合哲之五段に井目で、今は五子まで昇格したという。

■本ゲームソフト及び取扱説明書の制作に当り、以下の書籍から引用、または参考にさせていただきました。

「日本囲碁体系第3巻『道策』」（呉　清源／筑摩書房）
「本因坊秀策全集　3、4巻」（誠文堂新光社）
「本因坊秀哉全集　4、5、6巻」（日本棋院）
「囲碁年鑑」（日本棋院）
「巨星呉清源置碁」（呉　清源／清文堂新光社）

■資料提供・協力／財団法人　日本棋院

■パッケージデザイン／水野康子
■パッケージ写真提供／ボンカラー（撮影／津田　勝）
■取扱説明書構成・デザイン／山口一美
■制作／ワークハウス